

「使命に生きる～チャールズ・E・ガルスト」

ヨハネによる福音書 15 章 16～17 節

心理福祉学部兼人間福祉学部チャプレン 木村 太郎

皆さんが学んでいる聖学院大学は、キリスト教の理念に基づく大学です。ですから、この大学は、「キリスト教学校」と呼ばれます。しかし今日は、もう一つの言葉でこの大学を言い表したいと思います。それは、「ミッションスクール」という言葉です。聖学院大学はミッションスクールです。ミッションスクールとは、キリスト教のことを海外に宣べ伝えるグループ、「宣教師」と呼ばれる人々によって建てられた学校という意味です。この聖学院大学は、具体的に遡ること、アメリカの宣教師たちのキリスト教伝道活動に起源があります。

その宣教師の一人にチャールズ・E・ガルストという人がいました。彼は今から 140 年前の 1883 年に日本にやって来ます。ガルストが三十歳の時でありました。彼は日本に来る前、農業を学び、しばらく農業に関わる仕事をしていました。しかし、非常に優れた人格と能力の持ち主であったので、軍人になるべく陸軍士官学校に推薦されます。そこでガルストは四年間学びました。陸軍士官学校で学んだ人は、当然、軍人になります。軍人とは国のために働き、国のために命をささげる覚悟を持った人です。ガルストはそういう思いと共に、士官学校で学び始めたはずなのです。

しかし彼は、その学校で学ぶ四年間に大きな転換をします。そのきっかけとなったのは、二つのことだと言われます。一つ目は母親の死です。母親は敬虔なクリスチャンであり、彼女は常々、ガルストがキリスト教の伝道者になることを祈り願っていたのです。母親の死に接し、彼はその祈りを深く受け止めます。そしてもう一つは、学校にいる間に、アイザック・エレットという人の感化を受けたことです。エレットは、当時分裂していたキリスト教界を再び一致させるという運動をしていた人だと言われています。ガルストは彼が編集者を務めていた新聞を読むことを通して、その考えに共鳴したのです。

母親の祈り、そして、世界のキリスト教の一致を目指していた人からの影響。陸軍士官学校での四年間で、ガルストの人生が大きく変わります。今まで、アメリカという国のために働き、母国のために命を捨てる覚悟をすべく軍人になることを目指していたガルストは、キリスト教を宣べ伝える、つまり、イエス・キリストのために働き、キリストのために命を捨てる覚悟を持つに至るのです。そして、ガルストは日本に来るのです。それは、ガルスト自身の決心によることであつたに違いありません。彼は決断力と行動力があつたと言われています。しかし、人間の信念や決断は、時に弱く壊れやすいものです。彼も一人の人間であり、その例外ではなかつたはずなのです。

そのようなガルストを繰り返し支えたのは、様々な聖書の言葉でした。今日の聖書の言葉もその中の一つであったのではないかと想像します。改めてここで 16 節の言葉を朗読します。キリストがお語りになった言葉です。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたがはかかって行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである」。ガルストは、自らがキリストによって、アメリカという母国から、まだキリスト教が伝えられていない国に行くために選ばれたと信じたのです。言い換えれば、彼は自らに新しい使命が与えられたと信じたのです。ガルストの決断力や行動力の背後には、神によって与えられた使命への確信があったのです。

先ほど、「ミッションスクール」ということを申し上げました。この大学は、ガルストのような宣教師と呼ばれる人々によって建てられた学校という意味でミッションスクールです。しかし、その言葉は、この大学創設の歴史を表すだけではありません。ここで一つ覚えたいのは、ミッションとは「使命」という意味であることです。この大学は、皆さん一人ひとりにも与えられている人生のミッション、使命が何であるかを探求していく学舎なのです。皆さんがここで学んでいる意義は、自らに与えられている人生の使命とは一体何であろうかと考えていくことにあるのです。

わたしたちはまず、自らの興味や関心に基づいて、将来こういうことをやってみたい、ああいう職業についてみたいというおぼろげなイメージや夢を持ちます。そして、そのことが具体的に実現していくために様々な学び、努力を積み重ねていくのです。そのことを、神からの使命という側面から考えることができるのがこの大学です。神が皆さんひとり一人に使命、ミッションを与えてくださっているのです。

わたしたちは小さな者かもしれません。能力がないと思ってしまうかもしれません。他人と比較するとき、自らの至らなさを実感するかもしれません。にもかかわらず、時にそのように思い込んでしまうわたしたちであっても、神はこの世で生きていく使命を与えてくださっています。どんな人であっても、この社会のために、隣人のため、世界のために、神がわたしたちを用いてくださいます。キリストがおっしゃる通りです。「わたしがあなたがたを選んだ。あなたがた[は]はかかって行って実を結[ぶのだ]」。その使命が与えられていると信じる時、不思議と自らに与えられている賜物、ギフトに気付かされ、それが豊かに生かされていきます。

今日お話ししていますチャールズ・E・ガルストは、アメリカから日本に来た際、東北地方の秋田、そして山形でキリスト教の伝道活動をしました。その活動の中で、現地の人々の貧しさを目の当たりにします。特に農民の栄養状態が悪いことに心を痛めました。そこでガルストは一つのことを考えます。牛を飼って、牛乳で栄養を摂るということです。しかしそれだけではありません。牛から出たふんによって畑を耕し、そこにクローバーの種を撒いて牛の牧草としました。それは、人間生活と環境の好循環の仕組みを作ることになりました。ちなみに、今でも山形県の庄内地方にクローバーが多いのは、ガルストの影響によるものだとされています。そしてそれは、ガルストが以前学んだ農業の知識によるもの

であり、その賜物が豊かに生かされる結果になったのです。

ガルストは 45 歳で亡くなります。とても若く、短命でありました。彼は死期が迫る中で、「何か言い遺すことは」と問われ、「My life is my message」と言いました。「わたしの生き方(生き様)こそ、わたしのメッセージだ」と言うことができると思います。この言葉には、神によって与えられた使命、ミッションに人生をかけたことに後悔など何もなく、それは喜びであったというガルスト自身の思いが込められています。

皆さんも、この大学で学ぶ四年間で自らに与えられている使命を探求して欲しいと願います。もう既に方向性が決まっている人は、そのことが神から与えられた使命、ミッションであると考えてみて欲しいと思います。なぜなら、ガルストを支え、その人生を豊かにしたイエス・キリストが、時と場所を越えて、わたしたち一人ひとりに向かって、「わたしがあなたがたを選んだ。あなたがた[は]出かけて行って実を結[ぶのだ]」と語り続けてくださっているからです。

お祈りをいたします。

憐れみ深い天の父なる神よ、秋学期のこの学舎での営みの全てをお守りください。あなたが与えてくださっている使命に気づかせ、それぞれに与えられている良い賜物があることを喜び、認め合う歩みへと導いてください。これらの祈りと願いを、主イエス・キリストの御名によって御前におさげいたします。アーメン。

2023 年 10 月 13 日 聖学院大学 全学シリーズ礼拝「聖学院 120 周年を覚えて」